早稲田大学大学院文学研究科紀要 第68輯（2023年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.68 (Mar.2023)

菅原道真「東風吹かば」詠への表現史

御手洗 靖大

一、問題の所在

菅原道真の和歌といえば、次の拾遺集歌が最も知られているだろう。

ながされ侍りける時家の梅の花を見侍りて　贈太政大臣

東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな[1]

（雑春・一〇〇六）

『拾遺抄』雑上（三七八）に、同様の詞書をもって入集している。本稿は、両撰集にこの道真詠がいかにして迎え入れられたかを考察するものである。

当該歌は、仮託説が呈されている。まずこの問題について述べる。『後撰集』に、発想の類似した歌が道真詠として入集している。

家よりとほき所にまかる時、前栽のさくらの花にゆひつけ侍りける　菅原右大臣

桜花主を忘れぬ物ならば吹き来む風に言伝てはせよ

（春中・五七）

工藤重矩は拾遺集歌との類似を指摘しつつ、「あるいは後撰集の歌に拠って「東風吹かば」が偽作されたのかもしれない[2]」と指摘する。竹鼻績は『拾遺抄注釈』において、さらに次のように述べる。

道真が筑紫に出立したのは、『日本紀略』によると二月一日（グレゴリオ暦では二月二十七日）で、邸前に咲いていたのは梅の花であった。『後撰集』所収歌の第一句に「桜花」とあるのは、目前に咲いている梅の花ではなく、主人の道真がいなくなった後に咲くであろう桜の花に、吹き来む風に花の便りを伝えてほしいと呼び掛けたのであろう。『北野縁起』の二首は同じときに詠まれたので、同じ詩想になってもやむをえないという弁解が成り立つが、この二首から『後撰集』が後世に人口に膾炙した「東風吹かば」の歌でなく、「桜花」の歌を何故に撰取したのか理解しがたい。これは二首が同じ時に詠まれた歌として記

録されるようになったのは『後撰集』成立後のことで、道真が筑紫下向のときに「匂ひおこせよ」と呼びかけたのは、目前に咲く梅の花ではなく、これから咲く桜の花に対してであったと考えられる。このように考えると、『後撰集』所収の「桜花」の歌がまず詠まれ、「東風吹かば」の歌は後人によって、改作された歌ではないかと考えられる。[3]

しかし、『後撰集』歌の詞書を信頼すれば、これは桜が咲いている時節の詠である。「目前に咲く梅の花ではなく、これから咲く桜の花に対してであった」とする竹鼻の仮説は成立しえない。竹鼻は加えて、眼前の花を問題とするが、拾遺集歌の初句「東風ふかば」は仮定条件であり、眼前の景と関係がない。梅の季節であれ、桜の季節であれ、詠歌状況は矛盾しない。

そもそも、後撰集歌の詠歌状況は、北村季吟『八代集抄』が「讃岐任国の頃にや左遷の御時なとなるへし」と説くように、讃岐守赴任時と大宰府左降時の両説がある。[4]讃岐守赴任は仁和二年（八八六）正月一六日、都の出立は明かでないとしつつも、滝川幸司は、「国司赴任の準備期間については、讃岐は国の等級では中国にあたり、三〇日が与えられる（延喜交替式）。正月一六日任官なので、二月中旬には出発したか」とする。[5]これは『後撰集』歌の詞書「前栽のさくらの花」と矛盾しない。

道真の詠歌資料が仮託詠と混在している以上、真作の問題は決着しない。[6]しかし、あくまで『後撰集』の詞書によれば、前栽の桜の花が咲いている時節の詠であり、むしろ二月中旬出立と思われる讃岐赴任時の説が有力といえる。

撰集の詞書は、あくまで撰者の理解を示すものであって、配列による歌群の生成など、歌集内の論理によって改変されうる。後撰集歌も、讃岐下向時の詠を大宰府左降時の詠に見せかけて不明瞭に処理したとも考えられよう。既に拙論[7]でも述べたとおり、『後撰集』は当時の道真像の反映か、出立先を朧化している。工藤や竹鼻の仮託説のように、『後撰集』歌を大宰府下向時の所詠と定める根拠はない。

一方、拾遺集歌は、詞書に「家のむめの花を見侍りて」とある。大宰府にむけての出立は、竹鼻が考証するように、梅の時季である。詠歌状況に矛盾はない。詞書に従えば、後撰集歌は讃岐赴任時の可能性が高く、拾遺集歌が大宰府下向時の詠と思われる。しかし、繰り返しになるが、これはあくまで撰集の詞書をもとにして考えた場合である。後撰集歌に見えるような操作が、『拾遺集』にもある可能性も否定できない。

本稿は、以上のような拾遺集歌の真作・偽作問題や、配列や詞書といった歌集の論理からは一旦距離を置き、なぜ当該歌が『拾遺抄』、『拾遺集』に迎え入れられたのかを、表現史から考察する。特に、「東風吹かば」と「にほひおこせよ」に着目する。竹鼻説の問題は、初句「東風吹かば」の吟味がなされていなかった点にある。まず、「東風吹かば」から考えたい。

二、『万葉集』の花と風

春に東風が吹くとは、『礼記』「月令」の「東風解凍」が典拠である。すなわち、東から吹いてくる春の風が氷を解かす、春の到来を象徴する漢籍表現である。当該歌は、「東風吹かば」と春が到来したその時点を仮定し、「匂ひおこせよ」とあるように、東風という春を知らせる風にあわせて花を咲かせ、その風に乗せてかぐわしい香りをこちらに届けてくれと呼び掛ける。

ところで、近藤みゆきは、十一世紀初頭の歌人である源道済の和歌表現をめぐって、和歌では花を散らす春風が常套的であり、花を開かせる風は、漢詩において常套的な表現であったことを指摘した。その論の中で、当該歌について次のように述べる。

学儒文人・道真の作自体、古今的表現体系からは例外的であるようである。和歌においては、花に吹く春風とは、「春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつろふと見む」（古今集・春下・八五・藤原良風）と、花を「移ろ」わせるものであり、あるいは「春風は花のなき間に咲き果てね咲きなば思ひなくて見るべく」（拾遺集・雑春・一〇三五・読人しらず）のように、「花のなき間に咲き果てね」「よきて吹け」と厭われる対象だった。[8]

確かに、「風が花を散らす」発想からすれば、当該歌は例外的であろう。しかし、それは「古今的表現体系」から「例外的」と言えるのだろうか。本節と次節にわたって、『万葉集』から『古今集』にかけての風と花の表現を分析する。まずは『万葉集』を考える。

『万葉集』の風の歌は八九首という。[9] 春の花と共に詠むのは次の五首。『万葉集』の風と花の用いられ方を見るため、以下、煩を厭わず分析していく。

大伴坂上郎女歌一首

風交　雪者雖零　実尓不成　吾宅之梅乎　花尓令落莫
かぜまじり　ゆきはふるとも　みにならぬ　わぎへのうめを
はなにちらすな　（巻八・春雑歌・一四四五）

厚見王贈久米女郎歌一首

室戸在　桜花者　今毛香聞　松風疾　地尓落良武
やどにある　さくらのはなは　いまもかも　まつかぜはやみ
つちにちるらむ　（巻八・春相聞・一四五八）

忌部首黒麻呂雪歌一首

梅花　枝尓可散登　見左右二　風尓乱而　雪曽落久類
うめのはな　えだにかちると　みるまでに　かぜにみだれて
ゆきぞふりくる　（巻八・冬雑歌・一六四七）

春三月諸卿大夫等下難波時歌二首〈并短歌〉

白雲之　竜田山之　滝上之　小桜嶺尓　開乎為流　桜花者　山
高　風之不息者　春雨之　継而零者　最末枝者　落過去祁利
下枝尓　遺有花者　須臾者　落莫乱　草枕　客去君之　及還来

しらくもの　たつたのやまの　たきのうへの　をぐらのみねに
さきををる　さくらのはなは　やまたかみ　かぜしやまねば
はるさめの　つぎてしふれば　ほつえは　ちりすぎにけり　し
づえに　のこれるはなは　しましくは　ちりなまがひそ　くさ
まくら　たびゆくきみが　かへりくるまで
（巻九・雑歌・一七四七）

反歌

吾去者　七日不過　竜田彦　勤此花乎　風尓莫落
わがゆきは　なぬかはすぎじ　たつたひこ　ゆめこのはなを
かぜになちらし
（巻九・雑歌一七四八）

難波経宿明日還来之時歌一首并短歌

嶋山乎　射徃廻流　河副乃　丘辺道従　昨日己曽　吾越来壮鹿
一夜耳　宿有之柄二　峯上之　桜花者　滝之瀬従　落堕而流
君之将見　其日左右庭　山下之　風莫吹登　打越而　名二負有
社尓　風祭為奈
しまやまを　いゆきめぐれる　かはそひの　をかへのみちゆ
きのふこそ　あれこえこしか　ひとよのみ　ねたりしからに
をのうへの　さくらのはなは　たきのせゆ　ちらひてながる
きみがみむ　そのひまでには　やまおろしの　かぜなふきそと
うちこえて　なにおへるもりに　かざまつりせな
（巻九・雑歌・一七五一）

我刺　柳糸乎　吹乱　風尓加妹之　梅乃散覧
わがかざす　やなぎのいとを　ふきみだる　かぜにかいもが
うめのちるらむ
（巻十・春雑歌・詠花・一八五六）

一四四五番歌（かぜまじり…）は、初春の雪にまじる梅を詠むが、風は雪に交じり花を散らすものとして詠まれる。梅を散らす雪は、同じ坂上郎女の次の歌に見える。[10]

沫雪乃　比日続而　如此落者　梅始花　散香過南
あわゆきの　このころつぎて　かくふらば　うめのはつはな
ちりかすぎなむ
（巻八・冬雑歌・一六五一）

一四五八番歌（やどにある…）は厚見王が久米郎女に送ったもの。女の家の落花の美しさを思いやった風流の歌を装いながら、裏に、しきりに迫る男のあるままにその他（あだ）し男に心を移しているのではないかという意を寓しているのであろう。桜は山桜であるとされる当代にあって、ことさら「やどにある」とことわったのは、そこに、あなたは私のものなのにの意を込めようとしてのことかと察せられる。[11]

と伊藤博が評するように、これは桜に寄せた相聞歌である。花が散ることは、次の四〇〇番歌のように、女が他の男のもとへなびくことをもいう。

大伴宿祢駿河麻呂梅歌一首

梅花　開而落去登　人者雖云　吾標結之　枝将有八方
うめのはな　さきてちりぬと　ひとはいへど　わがしめゆひし
えだにあらめやも
（巻三・譬喩歌・四〇〇）

一七四七番、一七四八番歌は難波と都を往復する時の詠で、高橋虫麻呂歌集歌である。一七四七番の往路の長歌（しらくもの…）は、年次不明であるが、諸注、天平四年（七三二）前後の詠かとする。[12] 坂上郎女詠（かぜまじり…）も、天平年間の詠（巻六・九七九など）が残る人であり、同時代の歌作と言える。当該長歌は、「やまたかみ　かぜしやまねば　はるさめの　つぎてしふれば」とあるように、落花を風単独の所為とするのではなく、春雨をも取り入れている。坂上郎女詠も、落花に風と雪を取り混ぜていた。

雪が梅を散らすことは見たが、春雨も果たして梅を散らすものであった。

梅花　令散春雨　多零　客尓也君之　廬入西留良武

うめのはな　ちらすはるさめ　いたくふる　たびにやきみが　いほりせるらむ　（巻十・春相聞・寄雨・一九一八）

このように、『万葉集』では、雪と雨に並んで、花を散らす天象として風がある。長歌では風と春雨が花を散らすものとして提示されていたが、反歌では、竜田社の風神竜田彦に因んで風が選択され、「たつたひこ　ゆめこのはなを　かぜになちらし」となっている。一七五一番歌（しまやまを…）は帰路の長歌で、やはり竜田彦の神を意識して風に散る花を詠み込む。

一八五六番歌（わがかざす…）は、一首目の一四三七番歌（かすみたつ…）と同様、風が単独で花を散らす例である。自分がかざしている柳を乱す風に、愛する妻の家の梅も散っていることだろうという意。これは風を媒介として遠方を想起する歌であり、道真詠の「にほひおこせよ」の発想と関わるものである。これについては後述する。

以上、春の花と風の関係を『万葉集』から見てきた。『万葉集』では、春の風は花を散らすものであった。加えて、春以外でも四季にわたって風は花木を散らすものであったことも指摘しておきたい。

風散　花橘叫　袖受而　為君御跡　思鶴鴨

かぜにちる　はなたちばなを　そでにうけて　きみがみあとと　しのひつるかも　（巻十・夏雑歌・詠花・一九六六）

吾岳之　秋芽花　風乎痛　可落成　将見人裳欲得

わがをかの　あきはぎのはな　かぜをいたみ　ちるべくなりぬ　みむひともがも　（巻八・秋雑歌・一五四二・大宰帥大伴卿歌二首）

十月　鍾礼尓相有　黄葉乃　吹者将落　風之随

かむなづき　しぐれにあへる　もみちばの　ふかばちりなむ　かぜのまにまに　（巻八・橘奈良麻呂結集宴歌十一首・一五九〇・大伴池主）

三、『古今集』の花と風

前節冒頭で取り上げた近藤の指摘とは、「古今的表現体系」からすると春の風は花を散らすものであり、厭うものであるというもの

だった。確かに『古今集』の春風の歌は、花を散らすものが十六例（集中の風の歌は二三例）。そのうち風を厭うものが次に示すように四例見える。

さくらの花の散り侍りけるを見て詠みける　素性法師

花散らす風の宿りは誰か知る我に教えよ行きて恨みむ

（古今集・春上・七六）

春宮の帯刀陣にて桜の花の散るをよめる　藤原好風

春風は花のあたりを避きて吹け心づからや移ろふと見む

（古今集・春下・八五）

吹く風を鳴きて恨みよ鶯は我やは花に手だに触れたる

（古今集・春下・一〇六）

百和香　よみ人しらず

花ごとに飽かず散らしし風なれば幾そばく我が憂しとかは思ふ

（古今集・物名・四六四）

しかし、特に花を散らす風については、見てきたように、『万葉集』からある、常套的な発想である。そして、風を厭うという発想も、そこから容易に及びうる。

花と風の関係を考える上で、『古今集』前夜に催された宇多帝の和歌催事に注目すべき作が見える。

吹風哉　春立来沼砥　告貫牟　枝丹牢礼留　花拆丹芸里

フクカゼニ　ハルタチキヌト　ツゲツラム　エダニコモレル

ハナサキニケリ

（新撰万葉集・上・一五）

寒灰警節早春来　梅柳初萌自欲開

上苑百花今已富　風光処処此傷哉

（新撰万葉集・上・一六）

『新撰万葉集』[13]所収の一首。宇多帝が実質的に主催した是貞親王家歌合と寛平御時后宮歌合の歌を資料とし、そこに詩を番えたものである。『後撰集』（春上・一二）に「寛平御時きさいの宮の歌合のうた　よみ人しらず」として同歌を収めるので、寛平御時后宮歌合での出詠歌と分かる。

『新撰万葉集』では歌が真仮名によって記されるが、特に「花拆丹芸里」の「拆」は「風によって一気につぼみを切り開くという感覚を表現しようとした意識的な用字法」[14]という。また、和歌では「花」とあるものが、漢詩では梅となっている。寛平御時后宮歌合での和歌表記は窺い知れないが、『古今集』成立前夜の和歌に、花を開かせる東風という意識のあったことがうかがえる好例といえよう。ここにおいて、東風と花の開花が共に歌われる。そして、漢詩においてそのような花は梅と規定される。

『古今集』の春風は、花を散らすだけではない。「東風解凍」が詠み込まれた歌が二首ある。[15]

はるたちける日よめる　紀貫之

袖ひちてむすびし水の凍れるを春立つ今日の風や解くらむ

（春上・二）

寛平御時きさいの宮のうたあはせのうた　源当純

谷風に解くる氷の隙ごとにうち出づる浪や春の初花

（春上・一二）

谷風は、『詩経』「邶風・谷風」の「習習谷風　以陰以雨」の句に対して「東風謂之谷風（『毛詩正義』）」と説かれてあり、東風のことをさすことが分かる。とくに、源当純詠は解けた川の氷から噴き出す水を花と見立てたもので、厳密には花とはいえないが、この見立ても「東風解凍」と、それと同時に花が開くという発想をもとにしている。

また、源当純詠は『新撰万葉集』にもとられ、次の詩と番えられる。

溪風催春解凍半　白波洗岸為明鏡
初月含丹色欲開　咲殺蘇少家梅柳（新撰万葉集[16]・下・二四〇）

溪風は谷風、すなわち東風が春を促して氷も半ば解かし、水量の増した川に汀は洗われ輝きを増す。正月は、紅を含んで今にも花開きそうで、「蘇少の家の梅と柳」も咲き乱れている、と解釈できようか。蘇少とは、蘇小小のことで南斉時代の妓女。『白氏文集』「杭州春望」に「柳色春蔵蘇小家」とあるように、春の柳の名所として唐詩に詠まれた[17]。この歌は「東風解凍」をもとにするが、番えられた漢詩は、東風のイメージによって梅の開花まで引き延ばされている[18]。漢詩における東風と梅の関係が『新撰万葉集』からも理解できよう。

日本の漢詩では、例えば道真の師、島田忠臣の詩に次のような句がある。

春風何処不開花

（田氏家集・一七一「七言三日同賦花時天似酔応製一首」[19]）

島田忠臣は白居易の影響を受けていることは夙に指摘されているとおりである[20]。これは寛平三年（八九一）に宇多帝主催の曲水宴での作で、道真も出席し序を認めている。

『古今集』の時代の春風と花の良好な関係は、漢詩圏の発想である。ではその淵源となる漢詩句とはいかなるものか。時代が下るが、十世紀の文人が共有知識とする漢詩句を取り集めた『千載佳句[21]』に次の句がとられることは注目すべきだろう。

先遣和風報消息　続教啼鳥説来由　（千載佳句・早春・八）

これは『白氏文集[22]』巻十七、元和一二年（八一六）の作「春生」（七言律詩）頷聯の句である。和風、すなわち東風が春の到来をまず告げ、続いて谷から出てきた鶯がその鳴き声によって春がどこからやってきたのかを知らせる、というもの。この句に続く頸聯が次の句である。

展張草色長河畔　点綴花房小樹頭　（千載佳句・早春・九）

大河のほとりに緑を広げ、小さな梢には点々と色づいた蕾を付ける、と春の到来によって緑が増し花の枝も蕾がほころび始めることを詠む。

『古今集』中に、今取り上げた『白氏文集』の句「先遣和風報消息　続教啼鳥説来由」をもとにしている歌がある。寛平御時后宮歌合の出詠歌。

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる

（古今集・春上・一三・紀友則）

『千載佳句』以前、『古今集』の時代から白居易のこの詩句が知られていたことが分かる。

源当純詠とともに、これらは『古今集』成立前夜の、寛平御時后宮歌合の出詠歌であることに注意したい。[23]「古今的体系」と言えるかは措くとして、今まで見てきたような、風と花との良好な関係は、『万葉集』にない漢籍的発想であって、宇多朝の和歌からのものである。

道真詠に戻ると、「東風」が詠み込まれる歌は後述するように、十世紀半ばまで待たねばならないが、「東風吹かば」、すなわち春風に花が開くという発想そのものは、道真の生きた『古今集』成立前夜から見えるのである。

前節と本節で、『万葉集』から『古今集』にかけての春風を見てきた。『万葉集』以来、花を散らすものとして春風があったが、『古今集』になると、花の開花にあわせて吹く風も詠まれることを明らかにした。前節冒頭の近藤論に対しては、確かに『古今集』の典型的発想ではないかもしれないが、例外として無視できない、むしろ『古今集』に特徴的な表現と言える。

道真詠は「東風」に加え、「匂ひおこせよ」にも注目すべき点がある。すなわち、花開いた梅の香りを大宰府まで届けてほしいと風に託す点、特異である。これは『後撰集』所収道真詠（桜花…）にも共通する発想でもあり、歌の主題といえよう。次節ではこのような風の性質を考える。

四、「にほひおこせよ」「かぜのたより」

風が遠く離れた人の仲立ちとなるのは、例えば前節でも取り上げた万葉歌に見える。

我刺　柳糸乎　吹乱　風尓加妹之　梅乃散覧
わがかざす　やなぎのいとを　ふきみだる　かぜにかいもが
うめのちるらむ　（巻十・春雑歌・詠花・一八五六）

他にも、巻一には、次の長歌と反歌が見える。

幸讃岐国安益郡之時軍王見山作歌
霞立　長春日乃　晩家流　和豆肝之良受　村肝乃　心乎痛見
奴要子鳥　卜歎居者　珠手次　懸乃宜久　遠神　吾大王乃　行
幸能　山越風乃　独居　吾衣手尓　朝夕尓　還比奴礼婆　大夫
登　念有我母　草枕　客尓之有者　思遣　鶴寸乎白土　網能浦
之　海処女等之　焼塩乃　念曽所焼　吾下情
かすみたつ　ながきはるひの　くれにける　わづきもしらず
むらきもの　こころをいたみ　ぬえことり　うらなけをれば
たまだすき　かけのよろしく　とほつかみ　わごおほきみの
いでましの　やまこすかぜの　ひとりをる　わがころもでに
あさよひに　かへらひぬれば　ますらをと　おもへるあれも
くさまくら　たびにしあれば　おもひやる　たづきをしらに

あみのうらの　あまをとめらが　やくしほの　おもひぞやくる
あがしたごころ　（巻一・雑歌・五）

反歌

山越乃　風乎時自見　寐夜不落　家在妹乎　懸而小竹樌

やまごしの　かぜをときじみ　ぬるよおちず　いへなるいもを
かけてしのひつ

問題としたい箇所に傍線を付した。坂本信幸は、古代において山は恋の障壁であるとともに、その山から吹いてきた「山越風」は、恋しい人の方から吹いてくる風であることを明らかにした。[24] 坂本の指摘をもとにすれば、当該長歌の傍線部は、その風によって妹への思いを強くするも、旅中の身ではひたすら恋い焦がれるしかないと解釈でき、反歌も、愛する妹のもとから吹く風によって、一晩中恋い焦がれていると理解できる。『万葉集』では風が遠く離れた人との媒介となっている。

坂本論でも指摘されているが、次の防人詠もこのことを示していよう。

伊倍加是波　比尓々々布気等　和伎母古賀　伊倍其登母遅弖
久流比等母奈之

いへかぜは　ひにひにふけど　わぎもこが　いへごともちて
くるひともなし

右一首朝夷郡上丁丸子連大歳

（巻二〇・二月七日駿河国防人部領使守従五位下布勢朝臣人主実進九日歌数廿首・四三五三）

坂本は当該防人詠に対して次のように述べる。

ここには、家から吹く風を日々身に受けてはいるが、何時帰れるとも判らぬ長い別離に、それだけでは足りえないで、家の妹からの伝言を望む防人の切なる望郷の思いが歌われているわけであるが、こういった「家風」という名詞が形成されるところに、旅にある人々の家郷から吹く風に対する意識の共通性、一般性を見うるのである。[25]

この心は故郷である都から大宰府へ、東風にのせて「匂ひおこせよ」と詠む当該道真詠にも通じるものである。

漢籍にも同様の例がみえる、『文選』に

願為西南風　長逝入君懷　（巻二三・哀傷・「七哀詩」・曹植）

がある。旅中の夫を待ち続ける妻が、西南の風になって、遠くまで吹いていってあなたの懐に入りたいと言ったのを詠んでいる。これは『万葉集』でみた風に通じるものと言えよう。[26]

『古今集』では、次の東歌が先ほどの風の性質を示していよう。

甲斐が嶺を嶺越し山越し吹く風を人にもがもや事伝てやらむ
（古今集・東歌・甲斐歌・一〇九八）

甲斐の嶺を越えてくる風がその人であったら、という願望は、『万葉集』にみた「山越風」の恋慕と通底する。山の向こうの愛する人に吹き付けた風が、愛するその人であったらというものであろう。諸注[27]恋の歌と取らないが、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』が「甲斐

の国の人が詠んだ恋歌」と評するのは首肯できる。なお、工藤重矩『後撰集』注釈[28]では、『後撰集』所収道真詠（桜花…）の類想歌とする。

また、『古今集』には、「風のたより」という表現が見える。前節でも取り上げた・寛平御時后宮歌合の友則詠である。

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべには遣る

（春上・一三・紀友則）

前節で『白氏文集』の影響を見たが、友則詠の「風のたより」について、佐伯梅友は次のように述べる。

わたくしは、風がいろいろな物を遠くまで吹き送るにつけて、こちらのものを向こうへとどける使者になぞらえて、風のたより（風というたより）と言つたものと考えたい。中国のことばに「風信」というのがあって、国語の風のたよりはこれを訳したものではないかとも考えられるが、その「信」というのも、使者をいうのがもとで、音信の意に転じたらしい[29]。

人であったらと、東歌で願われていた風は、「風信」という漢籍の語のごとく、遠くの人へ思いを届ける使者になぞらえられる[30]。しかし、『古今集』には、春の訪れを知らせはすれ、道真詠のような遠く離れた人へ吹き込む春風の歌は見えない。

一方で、『菅家文草』[31]には、そのような春風が見える。

苦海須臾今日別　霊山畢竟後生逢
慈悲若不忘郷里　便付春風送暁鍾

（巻四・「別遠上人」・二五〇）

道真が讃岐赴任時に交わった遠上人という僧との別れに際して詠まれた七言律詩の一部。讃岐を離れ、恐らく都へ行く遠上人に対して、もし郷里の讃岐の事をお忘れでないのならば、東から西へ吹く春風によせて暁の鐘の音を届けてほしい、と詠む[32]。「東風吹かば」「匂ひおこせよ」という発想は、道真の漢詩にも見いだせる。

次の作品にも同様の春風がみえる。

早春、陪右丞相東齋、同賦東風粧梅。各分一字〈探得迎字。〉

春風便逐問頭生
為翫梅粧繞樹迎
偸得誰家香剤麝
送将何処粉楼瓊

（以下略）

（菅家文草・巻一・六七）

春風が吹いて初生児は誰か問い、咲き誇る梅を風が巡ると詠む。続いて、梅の香を運ぶ風を誰の家から香を盗んできたのかと詠んでいる。道真詠の「匂ひおこせよ梅の花」の類想表現がここにうかがえる。

以上、本節では当該道真詠の「匂ひおこせよ」をめぐって、『万葉集』から『古今集』までの風の歌を見てきた。『万葉集』から風は、遠く離れた愛する人や場所（故郷）から吹いてくるものとして歌われてきた。それが『古今集』前夜の『寛平御時后宮歌合』において、漢詩表現を取り入れながら「風のたより」と詠まれるに至ったこと

を見てきた。同時に、漢詩にも離れた人のもとへ吹き込むものとして風が詠まれていた。特に道真の『菅家文草』には当該道真詠と同発想の漢詩句が見いだせた。

当該道真詠は、『万葉集』からの風の役割と、『古今集』から詠まれ始めた春風のあり方を重ねて用いていることになる。その点、東風を詠み込まない『後撰集』所収道真詠（桜花…）は『万葉集』から見える風の常套的な歌といえる。しかし、結局それら風の表現は、漢詩に通ずるものであった。むしろ『菅家文草』の漢詩にその発想がうかがえるのが当該歌の特徴である。本稿は道真と同時代の表現をもって当該道真詠の真偽を検証するものではないが、『菅家文草』の類想句や、和歌史的にも漢籍要素の強い表現を用いている点、道真本人の詠とも考えられよう。もちろん、『菅家文草』を用いた仮託歌の可能性も否めない。

五、河原院歌人圏と道真

では、当該歌はいかに『拾遺集』時代に迎えられたのかを考えたい。両集成立の十世紀末までに、当該歌を受け入れる表現的素地はできていたのだろうか。本節ではこの事を考える。

『拾遺集』時代にいたるまでの春風としての東風[33]を考えたい。まず、『古今集』では谷風としてあったが、隣人の三統元夏に送った次の貫之詠に「こち風」がみえる。

同じ元夏がもとより
こち風に氷解けなば鶯の高木にうつる声と告げなん
（貫之集・八七二）

また、『大和物語』（百二段）の歌にも見える。

おなじ女、のちに兵衛の尉もろただにあひて、よみておこせたりける。風吹き雨降りける日のことになん。
こち風は今日ひぐらしに吹くめれど雨も夜にはたよにもあらじな
とよみけり。（大和物語[34]・百十二段・おなじ女・一七五）

「兵衛の尉もろただ」について、『新編全集』はD系統本（文明十年藤原親長書写本ほか）の勘物を示し、天慶九年生まれの藤原兼輔四男庶正とし、天暦元年に右兵衛大尉に叙されるとある。

をちへゆくこちかぜ川の水もなほ春こそ淵の色深くなれ
（宰相中将公達春秋歌合・春・六八）

『宰相中将公達春秋歌合』は廿巻本の日記によると応和三年（九六三）の開催。いずれも村上朝での詠である。この時に、春風としての東風が歌語として受容される基盤ができつつあったといえるだろう。

『拾遺抄』・『拾遺集』成立前夜の撰集として『古今六帖』がある。これは歌が部類によってまとめられており、当時の和歌の享受のあり方がうかがえる。その中に東風を詠み込むものは一例ある。

をちへ行こち風河に誰しかも色さりがたき緑染めけむ

（古今六帖・第三・かは・一五三三）

歌仙家集本『伊勢集』（四四六）にも見える歌であるが、伊勢のものかは判然としない。何もかもを緑に染めるように川辺に緑を齎す春風を詠むが、これは『白氏文集』巻十七・「春生」の「展張草色長河畔　点綴花房小樹頭」からの発想だろうか。

『古今六帖』に加え、村上朝になったとされる『千載佳句』が、『白氏文集』の句を「早春」九番に収めていることは、前節で述べたとおりである。

では、十世紀末はどうか。この時代は近藤みゆきが夙に指摘するように、河原院に出入りした歌人集団が、漢詩文を和歌に取り込む中で新たな表現を生み出してきた[35]。

当該拾遺集詠と同発想の例は、果たして河原院歌人に注目すべき歌が見える。

白雪の降るとしながら庭の梅まづこち風に匂ひやはせぬ

（恵慶集・一〇六・庭梅）

かれこれ「北山に花見にいかむ、諸共に。」とあるを、「従僧なり」と留まりて言ひ遣る

身は留めつ心はおくに山桜たよりの風に匂ひおこせよ

（安法法師集・八〇）

河原院に出入りし、その主人である安法法師とも親交のある恵慶法師の歌は、雪がまだ降っているが、庭の梅はまず東風によって花が開き、香るだろうと詠む。今まで見てきたように、歌の中に「東風」と梅の開花を同時に詠み込む例は無かった。「まづこち風に」は、『白氏文集』巻十七・「春生」の「先遣和風報消息」の典拠を指摘できよう。この句は既に述べたように、『千載佳句』に、時代が下るが『和漢朗詠集』（早春・一〇）にもとられ、愛誦された詩句であった。しかし、「こち風に匂ひやはせぬ」は、当該拾遺集詠と類似する表現である。

拾遺集歌との類似性については、同じ歌人圏で作歌していた安法法師にも言える。これは東風の歌ではないが、第三句で花に呼び掛ける点、風にその花の様子を吹きよこすよう頼む点、類想的である。なにより結句「匂ひおこせよ」は、当該道真詠にしかみえない独自表現である。

当該拾遺集詠が道真詠であったとするならば、恵慶と安法は道真詠と接し、本歌取りとして享受していた、と言えよう。安法法師は九九〇年代には没しており[36]、『拾遺抄』・『拾遺集』にはふれ得なかった人物である。現在確認できる当該道真詠の初出は『拾遺抄』であるが、恵慶と安法それぞれの所詠は、両集以前にも、河原院歌人圏の中で道真の和歌が享受されていた可能性を示唆する。しかし、仮託説が捨てきれない以上、このような断定はできない。

道真詠が『源氏物語』の引歌となっていることについて、島津忠夫が『拾遺集』によらない同時代的な享受を想定していたが[37]、一世代前の河原院文化圏にもその可能性がうかがえることを指摘するにとどめておく。

一方で、当該歌が仮託であるとするならば、これまでみてきたように、表現史的には十世紀後半に詠まれた蓋然性が高い。河原院歌人によって、もしくは、彼らが接することのできる場において、当該歌が詠まれたのではなかろうか。河原院歌人の詠に、当該歌の特徴的な表現（花の開花とともに吹く東風、「匂ひおこせよ」という歌句）のみえることがこれを物語っている。

いずれにせよ、当該歌を道真詠として『拾遺抄』と『拾遺集』に入集する表現史的素地が、河原院歌人圏でできあがっていたことを示している。

当該拾遺集詠と同じく、真作・仮託説の問題を有する道真関連の拾遺集所載歌に、道真母詠がある。次の歌である。

菅原の大臣、冠し侍りける夜、母の詠み侍りける

ひさかたの月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしかな

（拾遺集・雑上・四七三）

『拾遺抄』では雑上（四三八）。稿者は「月の桂も折るばかり」の表現に注目して、入集の背景を考察した。[38] 月の桂を折るという表現は、『蒙求』に見られるような漢籍表現であって、十世紀後半になって和歌に詠まれ始める。次の二例が見いだせる。

清慎公月林寺にまかりけるに、おくれてまうできてよみ侍りける

藤原後生

昔わが折りし桂のかひもなし月の林のめしにいらねば

（拾遺集・雑上・四七二）

源順、司え賜はらで世を恨みて、朝忠の中納言の許に長歌よみて奉りたりけるを聞き侍りて、人々哀れがり、歌よみなどし侍りしかば、心一つに和し侍りてよみ侍りし

世中を　思へば苦し　忘るれば　えも忘られず　誰もみな　同じみやまの松柏と　ちよもちよもや　つかへむと　ながき頼みを　かくれぬの　下よりねざす菖蒲草　あやなき身をも　人なみに　かかる心を　思ひつつ　よにふる雪の　君はしも冬は年つみ　夏はなほ　草の蛍を　集めつつ　光さやけき　久方の月の桂を　をるまでに　しぐれにそほち　露にぬれ　へにけるそでの　ふかみどり　いろあせがたに　いまはなり…（以下略）

（能宣集・四四七）

長歌は源順へ贈られたもの。能宣もそれを贈られた順も「月の桂を折る」という表現を理解していたことが分かる。二人とも河原院に出入りした河原院歌人であり、安法や恵慶と同じ歌人圏にいる。

さらに、道真母詠の「家の風」についても、『能宣集』に次の歌が見いだせる。

梅花もてあそび侍る所

はるばると遠きにほひを梅の花、家の風こそ今ぞ伝ふれ

（一一七）

これは小野宮家の屏風に詠まれたものである。

漢籍をもととする道真関連詠の表現は、十世紀末に河原院歌人の歌に見いだせるのである。当該歌が偽作であれば、河原院歌人の手

による可能性が指摘できよう。

『拾遺抄』・『拾遺集』が成立する十世紀末までの「東風吹かば」の表現史を辿ってみれば、当該歌が真作であれ、偽作であれ、河原院歌人に行き着く。そうしてみれば、十世紀末の、歌人による道真享受の場として、河原院が浮かび上がって来る。

寛和二年（九八六）、「以其天神為文道大祖。詩境之主也。（『本朝文粋』・巻十三・願文上・四〇〇）」と、道真を賛仰した慶滋保胤の願文は、保胤を中心とする十世紀末の文人間に道真信仰の場があったことを示している。[39] 保胤が河原院に出入りした確たる記録はないが、河原院歌人たちとの交流はあった。具体的には、小野宮家の藤原頼忠の前栽歌合に歌人として列し、大中臣能宣や源順らと同席している。特に、順とは親しく、順の能登赴任に際して餞別の詩序を認めている（『本朝文粋』巻九「餞能州源史赴任、勧酔惜別序」）。その中で道真信仰の場が河原院歌人圏にも広がっていった可能性がある。この点については、河原院歌人圏を問題として、機会を改めて考えることとする。

これらの表現史的基盤と、河原院という道真享受の場を背景として、『拾遺抄』・『拾遺集』に当該歌が入集したのではないか。

六、まとめ

以上、『拾遺集』所収の道真詠の表現「東風吹かば匂ひおこせよ」をめぐって、その表現史をたどることで、『拾遺抄』と『拾遺集』の両撰集に当該歌が迎えられるにいたった表現的素地を明らかにし、また、当該歌は両撰集成立前夜に河原院歌人圏との関わりが想定できることを指摘した。

春風は『万葉集』では花を散らす存在であるが、『古今集』の時代にいたって開花の合図となる東風として春風（谷風）も詠まれる。一〇世紀以降は「こち風」として歌に詠まれる。しかし、東風と花開く梅が同時に詠まれる例は河原院歌人である恵慶法師まで見えない。

また、道真詠では、風に「匂ひおこせよ」と呼び掛ける。離れた所へ吹き込む風は『万葉集』から詠まれ、『古今集』に至って「風のたより」という歌語となるが、「匂ひおこせよ」という表現は、道真から二、三世代後の安法法師詠にしか見えない。安法法師は河原院の主人であり、一〇世紀後半の歌人圏を形成した。恵慶法師も河原院に通う歌人である。

以上の表現をたどることで、道真詠と類似表現を詠んだ歌人が、いずれも河原院という同じ歌人圏にあることを明らかにした。これは当該道真詠が河原院で享受、または生成された可能性を示す。道真と河原院歌人との関係を明らかにすることが次の課題となろう。これについては別の機会に論ずることにする。

※引用文の漢字は通用字体とし、漢文については訓点を省略した。

【付記】
本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費　課題番号22J11254）による成果の一部である。

注

（1）本稿における和歌とその歌番号は原則『新編国歌大観』によるが、『万葉集』については井手至ほか『新校注万葉集』（二〇〇八年、和泉書院）を基とし、平仮名別提訓とした。私意により表記を改めた。
（2）工藤重矩『後撰和歌集』（一九九二年、和泉書院）三一四頁
（3）竹鼻績『拾遺抄注釈』（二〇一四年、笠間書院）八七一頁
（4）『北村季吟古注釈集成　八代集抄　後撰集上』一九七六年、新典社による。また、実川恵子「後撰和歌集注釈―巻二春中（2）―」（『研究紀要第39集』文京女子大学短期大学部一九九五年一二月）も、讃岐下向時の詠とする。
（5）滝川幸司『菅原道真』二〇一九年、中公新書、八八頁
（6）『後撰集』歌も（当該『拾遺集』歌と共に）仮託とする説もある（熊谷直春「後撰集の「さくら花」の歌は菅原道真の作か」『古今集前後』二〇〇八年、武蔵野書房）。
（7）御手洗靖大「三代集の中の菅原道真」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』二〇二二年三月）
（8）近藤みゆき「源道済の和歌における漢詩文受容」（『古代後期和歌文学の研究』二〇〇五年、風間書房）一七〇頁。初出は一九八七年。
（9）宮島達夫編『万葉集巻別対照分類語彙表』（二〇一五年、笠間書院）による。
（10）佐竹昭広ほか『万葉集（二）』（二〇一三年、岩波文庫、三三三頁）
（11）伊藤博『万葉集釋注　四』一九九六年、集英社、四八九頁
（12）青木生子ほか『新潮古典集成』（一九七八年、新潮社）、小島憲之ほか『新編日本古典文学全集』（一九九五年、小学館）、佐竹昭広ほか『万葉集（三）』（二〇一四年、岩波文庫）など。なお、澤瀉久孝『万葉集注釈』（一九六一年、中央公論社）は天平六年とする。『日本古典文学大系』（一九五九年、岩波書店）は両説を記す。
（13）本文は、半澤幹一ほか『対釈新撰万葉集』（二〇一五年、勉誠出版）により、通し番号は『新編国歌大観』による。
（14）新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈』（二〇〇五年、和泉書院）九九頁。なお、「拆」の使用例として劉禹錫「畭田行」の「乗陽拆芽薛」や、白居易「履道春居」の「斜日拆花心」を指摘している。
（15）『古今集』における漢籍表現の典拠については、渡辺秀夫「古今集歌にみえる漢詩文的表現」（『平安朝文学と漢文世界』一九九一年、勉誠社）を参照した。
（16）『新撰万葉集』下巻については『新編国歌大観』による。
（17）蘇小小については、彭腊梅「蘇小小像の変遷―六朝詩から唐詩まで」（『熊本大学社会文化研究』二〇一〇年三月）参照。なお、この句は『千載佳句』（春興・七二）にとられている。
（18）ただし、『新撰万葉集』の下巻は序文にその成立が延喜一三年とあり、『古今集』時代の産物として当該漢詩を見るには慎重であらねばならない。が、漢詩表現のモチーフとなる和歌の「谷風」によって、梅の花を開くという発想を呼んでいる点は注目すべきであろう。
（19）小島憲之監修『田氏家集注巻之下』（一九九四年、和泉書院）による。
（20）金原理「嶋田忠臣と白詩」（『平安時代漢詩文の研究』一九八一年、九州大学出版会）、三木博雅「嶋田忠臣と白詩」（『白居易研究講座　第三巻』一九九三年、勉誠社）など。
（21）金子彦二郎『平安時代文學と白氏文集』（増補版）（一九五五年、培風館）による。なお、適宜国立歴史民俗博物館館蔵史料編集会編『貴重典籍叢書　国立歴史民俗博物館蔵文学篇　第二一巻』（二〇〇一年、臨川書店）を参照した。
（22）『新釈漢文大系』（明治書院）による。
（23）寛平御時后宮歌合に漢詩文の影響が強いことは諸注で指摘されている。

宮谷聡美「『古今集』と漢文学」（『平安朝文学研究』復刊第四号一九九五年）は『古今集』所収の当該歌合詠に絞って典拠論を集成している。

(24) 坂本信幸「山を超す風」（『万葉歌解』二〇二〇年、塙書房）初出は一九八八年

(25) 注(24)参照　四八頁

(26) 注(24)の坂本論では、中国文学の影響の可能性を示唆しつつも「自然に類想的発想を持ったものと考える」とする（五七頁注(11)）。

(27) 久保田淳ほか『和歌文学大系　古今和歌集』（二〇二一年、明治書院）、高田祐彦『古今和歌集』（二〇〇九年、角川文庫）など。

(28) 注(2)参照

(29) 佐伯梅友「詞苑逍遙（二）」（『國語』復刊第一巻第三號一九五二年、東京教育大学東京文理科大学國語國文學會）

(30) 風信という漢籍の語をもととするとも考えられるが、小島憲之は「風の使」を「中国的なものに限定するわけにはゆかないが」と慎重である（小島「万葉集と中國文學との交流」『上代日本文學と中國文學』一九六四年、塙書房　八九六頁）。

(31) 『日本古典文学大系』（一九六六年、岩波書店）による。

(32) この詩句については、『後撰集』所収道真詠と類似する発想の詩句として、工藤が指摘している（注(2)参照）。

(33) 春の到来を知らせるものでない東風の歌としては、『伊勢集』に「また、男　波高み海辺によらぬわれ船はこちてふ風や吹くとこそ待て（一九五）」、や、『師輔集』に「八十島のうらみてかへる舟よりやこがればこちの風ぞ吹かまし（三六）」が見える。

(34) 『新編日本古典文学全集』（小学館、一九九四年）による。

(35) 注(8)著書第一章と第二章を参照。

(36) 犬養廉「河原の院の歌人達」『平安和歌と日記』（二〇〇四年、笠間書院。初出は一九六七年）によれば、正暦三年に河原院で行われた五時講に安法の生存は確認できないとされる（二〇五頁）。『拾遺抄』の成立は長徳三年（九九七）とされるから、『拾遺抄』には触れ得ないということになる。

(37) 「菅原道真の和歌」『島津忠夫著作集　第十巻』和泉書院二〇〇六年一一七頁（初出一九八九年）

(38) 御手洗靖大「菅原道真とその母―拾遺抄所載歌の問題―」『国文学研究』二〇二〇年一〇月

(39) 吉原浩人「文道の大祖考―学問神としての天神の淵源」（河野貴美子他編『アジア遊学　日本における文とブンガク』勉誠出版、二〇一三年）。